

## コロナ禍における成人看護学慢性期実習の学生の学び －臨地実習と学内実習の両方を体験した学生の学びの認識－

野村 美紀\*・奥井 良子\*・長嶋 祐子\*

Students learning of chronic practice in adult  
nursing during the COVID-19 pandemic:  
Learning awareness of students who have experienced both on-  
the-job and on-the-campus practice

Miki NOMURA\*, Ryoko OKUI\*, Yuko NAGASHIMA\*

### 抄録

本研究の目的は、コロナ禍の影響により臨地実習と学内実習の両方を体験した学生が学んだと認識している内容を明らかにし、今後の臨地および学内実習への示唆を得ることである。学生のレポートから、『学び』として表現している内容を可能な限り意味内容が損なわれないように56のコードを抽出し、意味内容の類似性に従って20のサブカテゴリー、10のカテゴリーを生成した。臨地実習では、患者とのコミュニケーション、患者の価値観の理解、慢性疾患患者の理解、患者に合わせたケアの提供、について多く学びを得ていた。さらに、学内実習により自分自身を振り返り、自己成長の機会となっていた。しかし、臨地実習が短縮化されたことで、患者の権利や倫理観に基づいて行動すること、多職種連携のチーム医療についての学びが少なく、今後、臨地および学内実習、演習や講義、他領域実習の関連も考慮したカリキュラムを検討していく必要性が示唆された。

キーワード：成人看護学実習，学びの認識，コロナ禍

Key words：Chronic practice in adult nursing, Learning awareness, COVID-19 Pandemic

### I. はじめに

看護基礎教育における看護学実習は、「病院、施設、在宅、地域等の多様な場において、多様な人を対象として援助することを通して、対象者との関係形成やチーム医療における必要な対人関係形成能力を養い、看護専門職としての批判的・創造的思考力と問題解決能力の醸成、高い倫理観と自己の在り方を省察する能力を身に

付けることを目指す（文部科学省，2020a）」。  
そして、「実習の場を通して学生は、現実の場面のみがつくり出す看護する喜びや難しさとともに、自己の新たな発見を実感しつつ、看護の特質を理解し学習を深めていく。この過程を通して学生は大きく成長していく（文部科学省，2002）」、と言われている。実際、臨地実習は学生自らが実施した看護の効果を実感できること

\*駒沢女子大学 看護学部 看護学科

が成功体験につながる（佐藤ら，2012）や、学生は受け持ち患者との関わりを中心としたさまざまな体験をし、自分なりに自分の体験に意味づけしていく学習活動（安酸，2018）とされている。

A 大学においても成人看護学慢性期実習は、慢性的な健康障害をもつ成人期にある人（患者）と取り巻く人々を対象とし、看護過程の展開を通して必要な看護を実践する基礎的能力を養うことを目標としている。しかし、新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の全国的な発生により、実習施設でのクラスター（患者間の関連が認められた集団）発生により、臨地実習が急遽中断された。文部科学省（2020b）は、「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について」の通達において、実習施設での実習が困難な場合は、学内実習などの実施により必要な知識及び技術を習得することができるとあり、事前に準備していた臨地実習中止の場合の学習内容を学生の実習の進捗状況に合わせ実習プログラムを再構成し実施した。コロナ禍による臨地実習や演習内容の変更を余儀なくされた施設は多くあるが、学生の学びへの影響などを明らかにした文献は僅かである。そこで、臨地実習と学内実習の両方を体験した学生の学びを明らかにすることで、今後、臨地および学内実習での学習内容の構成、指導方法に示唆を得ることができるのではないかと考えた。

## II. 研究目的

成人看護学慢性期実習において、臨地実習と学内実習の両方を体験した学生が学んだと認識している内容を明らかにし、今後の臨地および学内実習への示唆を得る。

## III. 研究方法

### 1. 研究対象

A 大学 2020年成人看護学慢性期実習の3週間の実習期間で、臨地実習と学内実習を行い既に成績評価が確定している1グループ学生6名。

### 2. データ収集期間

倫理審査承認後～2021年8月末

### 3. データ収集方法

実習期間中に提出された「日々の行動計画」、「ビデオ視聴レポート」、「セルフマネージメント演習記録」、「カンファレンス記録」と実習最終日に提出された「成人看護学慢性期実習の学びのレポート」から『学び』として表現している内容を分析対象とした。

### 4. 分析方法

学生のレポートから、『学び』として表現している内容を、可能な限り意味内容が損なわれないようにすべて抽出し、意味内容の類似性に従って抽象度を高めながら、サブカテゴリー、カテゴリーとして整理した。分析にあたっては、共同研究者間で検討を行い、信頼性と妥当性の確保に努めた。また、分析結果の信頼性・妥当性を担保するために、当該実習に関与していない質的研究者のスーパーバイズを受けた。

## IV. 倫理的配慮

本調査は、対象者らの実習期間を避け Google classroom<sup>®</sup> を用いて、研究参加依頼書を提示し、Google meet<sup>®</sup> で書面と口頭で説明を行った。内容は、研究目的以外では使用しないこと、匿名性の保持、自由意志による参加であること、同意を得たあともいつでも中止できること、中止しても不利益は一切生じないこと、学業成績に影響しないこと、結果は学会等で公表すること等を説明した。その後、研究協力参加の意思確認を一定期間設けたのち、Google forms<sup>®</sup> で同意の確認を行い、研究参加へ同意

の回答があった学生に対して、同意書に署名しPDF（または画像）化したものを研究者へメール返信および、Google forms<sup>®</sup>の回答の提出をもって本研究協力への同意を得た。

なお、本研究は所属施設の倫理委員会での承認を得た（受理番号202102）。

## V. 成人看護学慢性期実習の概要

### 1. 実習目標

成人看護学慢性期実習の実習目標は、「慢性的な健康障害をもつ成人期にある人（患者）と取り巻く人々を対象とし、看護過程の展開を通じて必要な看護を実践する基礎的能力を養う。」である。到達目標は、1. 患者・家族に対して積極的な関心を持ち、適切な関係を築くことができる。2. 成人の特徴および健康状態を考慮に入れて、患者の個別的状況を総合的に理解できる。3. 患者の理解に基づき看護上の問題・患者のニーズを特定し、看護計画の立案、実践、評価ができる。4. 看護専門職者を目指す者としての責任を自覚し、患者の権利を擁護し、倫理観に基づいて行動できる。5. 患者に関わる関係従事者と連携の重要性を理解し、チームの一員として、協働しながら行動できる。6. 看護専門職者として、自己成長と看護の向上のために、主体的に学び続ける姿勢を身につける。7. 自己の看護観の確立に向けて、実施した看護を振り返り自己の学習課題を明らかにする。の7項目である。

### 2. 実習プログラムの実際（通常の実習）

成人看護学慢性期実習の実習期間は、3週間3単位の実習である。3週間の実習期間のなかで、慢性的な健康障害をもつ成人期の入院患者を受け持ち、患者および家族との関係を深めながら、看護過程を用いて必要な看護を実践する。患者と共に病棟以外にも検査・リハビリテーションなど実習場所を移動することを基本とし

ている。

3週間の臨地実習期間のうち3日間の学内日を設け、実習1日目の初日にオリエンテーションおよび技術チェックを実施。実習9日目は、「病みの軌跡カンファレンス」で受け持ち患者を病みの軌跡理論で捉えなおしを行っている。実習最終日には、「ヒヤリ・ハッとカンファレンス」を行い、実習中に体験したヒヤリ・ハッとした場面について分析し、医療安全についての学習を行い、実習全体のまとめを行っている。

### 3. 実習プログラムの変更の経緯

臨地実習1日目から臨地実習6日目（実習7日目）までは、通常通り臨地実習を行っていたが、新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の全国的な発生により、実習施設でのクラスター（患者間の関連が認められた集団）発生により、臨地実習7日目（実習8日目）以降の臨地実習が急遽中断となった。また、教員および学生の体調確認、行動自粛の確認が取れてから学内実習への切り替えを行った。

### 4. 再構築された実習プログラムの実際

事前に準備していた臨地実習中止の場合の学習内容を当該学生らの実習の進捗状況に合わせて実習プログラムを再構成した。具体的な学内実習の内容は、表1に記した。リモート、学内実習では医学映像教育センターのVISUALEARN CLOUD<sup>TM</sup>（以下、ビジュランクラウド<sup>TM</sup>）の教材事例を活用した。成人看護学慢性期実習で、見学または関わる可能性がある看護の教材ビデオを活用し学習した。また、教材事例をもとに看護過程の展開を行い、慢性疾患患者に必要なセルフマネジメントに関する援助計画を立案し、学生同士で患者役、看護師役となり実施した。さらに、実施後には患者役や観察者役の立場から、看護ケアに対しての評価を行った。

表1. 再構築された実習プログラム（実習初日～最終日までの実習内容）

1日目	学内実習：実習オリエンテーション 技術演習
2日目	臨地実習
3日目	臨地実習
4日目	臨地実習
5日目	臨地実習 中間カンファレンス（看護過程全体像・看護問題の発表）
6日目	臨地実習
7日目	臨地実習
8日目	リモート実習（行動制限の有無の確認中であったため） 今後の実習についてのオリエンテーション ビデオ（現場で役立つ看護技術）視聴しレポート提出 個別指導(meet):看護過程
9日目	学内実習 病みの軌跡カンファレンス 個別指導:看護過程
10日目	リモート実習 個別指導(meet):看護過程 ビデオ（摂食・嚥下のメカニズム）視聴しレポート提出 ビジュラクラウド™事例を視聴し2事例目の看護過程の情報の整理・アセスメント
11日目	学内実習 個別指導:看護過程 セルフマネージメントに関連した援助計画の実施とフィードバック カンファレンス ビデオ（腎臓病と透析看護）視聴しレポート提出
12日目	学内実習 個別指導:看護過程 セルフマネージメントに関連した援助計画の実施とフィードバック カンファレンス ビデオ（多様ながん看護）視聴しレポート提出
13日目	学内実習 個別指導:看護過程 セルフマネージメントに関連した援助計画の実施とフィードバック カンファレンス ビデオ（映像で理解する経管栄養の技術）視聴しレポート提出
14日目	学内実習 個別指導:看護過程 最終カンファレンス（看護過程のまとめ） ビデオ（看護におけるKYT）視聴しレポート提出
15日目	学内実習：ヒヤリハットとカンファレンス 個人面談（実習の振り返りと今後の課題）、記録提出

## VI. 結果

Google forms® による無記名のアンケートより、A 大学 2020年成人看護学慢性期実習の3

週間の実習期間で、臨地実習と学内実習を行い既に成績評価が確定している学生6名全員から研究参加の同意が得られた。学生のレポートから、学生が学んだとした認識のローデータから56のコードが抽出された。意味内容の類似性に従って19のサブカテゴリー、10のカテゴリーを生成した。また、学生の学びを得た場所として、“臨地実習”、“学内実習”、“全体を通して”のそれぞれの場所についても表2に示した。さらに、生成したカテゴリーと成人看護学慢性期実習到達目標との符合についても確認した。

以下、「」はコード、< >はサブカテゴリー、【 】はカテゴリーを示す。

### 1. 【患者とのコミュニケーション】

「構音障害のある患者との関わりからコミュニケーションの重要性を再認識」「実習先でしか経験できない患者とのコミュニケーションの大切さ」などの3つコードから、<患者とのコミュニケーションの大切さ>のサブカテゴリーが生成された。このカテゴリーは、実習目標1と符合していた。

### 2. 【患者の価値観の理解】

<患者の価値観に寄り添う看護><患者への傾聴と共感>の2つのサブカテゴリーが生成された。<患者の価値観に寄り添う看護>は、「患者の気持ちを聞きながらケアを提供していくことが、患者に寄り添うこと」「患者の価値観や生き方を理解し思いに寄り添うことができる」などの6つのコードがあった。<患者への傾聴と共感>は、「様々な苦痛と不安を抱えている患者に傾聴・共感すること」「患者の気持ちや疾患・治療・現状をどのように捉え、今後に対する希望を聞くことが大切」などの3つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標1と符合していた。

### 3. 【慢性疾患患者の理解】

<患者背景の理解><患者の病気の過程の把握>

表2. 成人看護学慢性期実習で学生の学びの認識

コード	学びの場所	サブカテゴリー	カテゴリー	
構音障害のある患者との関わりからコミュニケーションの重要性を再認識	臨	患者とのコミュニケーションの大切さ	患者とのコミュニケーション	
実習先でしか経験できない患者とのコミュニケーションの大切さ	学			
ケア後に労いの一言を伝えたりコミュニケーションをとること	全			
患者の気持ちを聞きながらのケアを提供していくことが、患者に寄り添うこと	臨	患者の価値観に寄り添う看護	患者の価値観の理解	
病気への不安や社会的役割の遂行困難が生じている患者に対し、病気に対する思い聞く必要性	学			
患者の訴えを予測、察することでよく理解者となれる	臨			
患者の価値観や生き方を理解し思いに寄り添うことができる	全			
患者が望む生活を考慮し、患者の価値観や目標にあった看護をしていくことが大切	学			
患者の生き方や今後に対する患者の希望を知る	全			
様々な苦痛と不安を抱えている患者に傾聴・共感すること	全			
理解度を確認し、患者自身の気持ちを言葉で伝えてもらう	学			
患者の気持ちや疾患・治療・現状をどのように捉え、今後に対する希望を聞くことが大切	学			
患者の今の訴えに注目するだけでなく、慢性疾患を持つ患者という視点をもつこと	全			患者背景の理解
患者背景を知り理解しようとする姿勢を持ちながら関わることの大切さ	学			
患者の病気の一面だけを見るのではない	学			
疾患の発症までの過程や治療への理解	臨	患者の病気の過程の把握		
患者の生活と病気を“病みの軌跡”を用いて考えことで、患者の生活を主体とした病気の過程を理解	学			
患者が抱えてきた病歴と、退院後もその疾患と付き合っていく慢性期の患者であることを認識・理解	学			
患者の病みの軌跡や価値観などを尊重しながら、慢性疾患と付き合っていくための方法を一緒に考える	全			
ケア提供する上で病気とともに生活する患者の個性が必要	臨		個別性のある看護	
自分（学生）本位のケアの提供ではなく、患者に直接聞き、患者が望むケアの提供を行う	臨	個別性の看護の提供		
ケアの提供により「～になってほしい」というのは私（学生）の理想	全			
患者が本来持っている回復力や機能を生かした看護を行うことの重要性	全		患者の状態・ニーズに合わせたケアの提供	
患者の病状悪化を防ぎ、QOL維持を考えたケアの提供	臨	患者に合わせたケアの提供		
患者の思いを傾聴しながら、病状悪化を防ぐケア	臨			
患者の状態・ニーズに合わせたケアの提供	臨			
患者の体調変化に合わせた対応	全			
実際の患者を前にして日々変化する容態から看護援助を考える	全			
患者の希望や気持ちも聞き、今後も含めた生活全体を考えた視野や捉え方が必要	臨			
退院後の生活に合わせたリハビリ	臨			
食べること、座ること、トイレに行くこと、話すことなどの日常生活のすべてがリハビリテーション	臨			生活に合わせたリハビリテーション
言葉以外の反応（表情・目線の動きなど）からの患者の状態の把握	臨		患者の状態を観察する	
バイタルサイン測定・全身観察による患者の状態の把握し、再発の早期発見や状態変化を観察すること	臨			
毎日の変化を直接目で見て観察	臨			
日の容態によって変わることもあれば、気分によって変わる	全	患者の状態をアセスメントする		
再発の早期発見や状態の変化を観察すること	学			
知識を提供するだけでなく、患者が実行可能なか生活を理解したうえでの教育指導	学	患者が実施可能な指導を考える	患者への指導方法の検討	
正しい方法を提示するだけでなく、患者自らが継続可能な方法を提案することで行動変容が起きやすくなる	学			
意欲を高めるために患者の今までの自己健康管理状況について振り返る場を提供すること	学	患者と一緒に指導内容の確認		
自己健康管理では、実施状況の確認と指導を繰り返し行う	学			
患者の自己管理方法は、患者への動機づけや継続させるための方法を一緒に考えていくことが大切	学			
患者自身に管理方法を決定してもらうことにより、自己効力感を高めることができる	学			
患者の認知度や状況に合わせた指導方法の工夫	学			患者の理解度に合わせた指導方法
患者指導の際は、病気・治療についてなど一度に伝えると、情報量が多く伝わらない	学			
患者指導のロールプレイを行い、グループメンバー検討したことで、新しい改善方法を見つけることが出来た	学			
患者指導や説明を行う際は、患者の理解度や自己管理の実施状況を把握する	学			
理学療法士や言語聴覚士からの患者の個性に合わせたリハビリ指導	臨	多職種連携によるリハビリテーション	多職種連携	
患者指導するために、自分（学生）が病気の理解が必要	臨	基本的な学習・知識不足	自己成長の機会	
ビデオ動画学習であらためて、患者の疾患を人体の構造・機能を学ぶことが出来た	学			
患者の価値観に寄り添う看護師になりたい	全	自己の看護観		
臨床での自分自身の行動を振り返り、反省点、改善点に気づくことが出来た	学	実施したケアの振り返り		
学内実習を通し、実施したケア内容や患者の気持ち等、自分の行った看護を振り返ることができた	全			
演習を通して、患者説明時の自分（学生）の話し方の特徴に気づけた	学	臨床での自己の傾向に気づく	多様な実習形態	
患者の病歴理解と、心理面・精神面に対して理解できていなかった	全			
臨床・リモート・学内実習と通じて様々な立場を体験することが出来た	学	多様な実習形態		
看護師役、患者役、観察者役のそれぞれの立場を通して感じたことや気づけたことが多くあった	学			

\* 学びの場所：臨（臨床実習での学び）、学（学内実習・演習での学び）、全（全体を通しての学び）

\* 学びの場所：臨（臨床実習での学び）、学（学内実習・演習での学び）、全（全体を通しての学び）



握」の2つのサブカテゴリーがあった。＜患者背景の理解＞は、「患者の今の訴えに注目するだけでなく、慢性疾患をもつ患者という視点をもつこと」「患者の病気の一面だけを見るのではない」などの3つのコードがあった。＜患者の病気の過程の把握＞は、「患者の生活と病気を“病みの軌跡”を用いて考えたことで、患者の生活を主体とした病気の過程を理解」などの4つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標2と符合していた。

#### 4. 【個別性の看護の提供】

＜個別性のある看護＞の1つのサブカテゴリーがあり、「自分（学生）本位のケアの提供ではなく、患者に直接聞き、患者が望むケアの提供を行う」などの4つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標3と符合していた。

#### 5. 【患者に合わせたケアの提供】

＜患者の状態・ニーズに合わせたケアの提供＞＜生活に合わせたリハビリテーション＞の2つのサブカテゴリーがあった。＜患者の状態・ニーズに合わせたケアの提供＞は、「患者の病状悪化を防ぎ、QOL維持を考えたケアの提供」「患者の思いを傾聴しながら病状悪化を防ぐケア」などの6つのコードがあった。＜生活に合わせたリハビリテーション＞は、「退院後の生活に合わせたリハビリ」などの2つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標3と符合していた。

#### 6. 【患者の観察とアセスメント】

＜患者の状態を観察する＞＜患者の状態をアセスメントする＞の2つのサブカテゴリーがあった。＜患者の状態を観察する＞は、「言葉以外の反応（表情・目線の動きなど）からの患者の状態の把握」などの3つのコードがあった。＜患者の状態をアセスメントする＞は、「日の容態によって変わることもあれば、気分によって変わる」「再発の早期発見や状態の変化を観

察すること」の2つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標3と符合していた。

#### 7. 【患者への指導方法の検討】

＜患者が実施可能な指導を考える＞＜患者と一緒に指導内容の確認＞＜患者の理解度に合わせた指導方法＞の3つのサブカテゴリーがあった。＜患者が実施可能な指導を考える＞は、「知識を提供するだけでなく、患者が実行可能なか生活を理解したうえでの教育指導」などの2つのコードがあった。＜患者と一緒に指導内容の確認＞は、「患者の自己管理方法は、患者への動機づけや継続させるための方法を一緒に考えていくことが大切」「患者自身に管理方法を決定してもらうことにより、自己効力感を高めることをできる」などの4つのコードがあった。＜患者の理解度に合わせた指導方法＞は、「患者指導や説明を行う際は、患者の理解度や自己管理の実施状況を把握する」などの4つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標3と符合していた。

#### 8. 【多職種連携】

＜多職種連携によるリハビリテーション＞の1つのサブカテゴリーがあった。「理学療法士や言語聴覚士からの患者の個別性に合わせたリハビリ指導」というコードが1つあった。このカテゴリーは、実習目標5と符合していた。

#### 9. 【自己成長の機会】

＜基本的な学習・知識不足＞＜自己の看護観＞＜実施したケアの振り返り＞＜臨床での自己の傾向に気づく＞の4つのサブカテゴリーがあった。＜基本的な学習・知識不足＞は、「患者指導するために、自分（学生）が病気の理解が必要」「ビデオ動画学習であらためて、患者の疾患を人体の構造・機能を学ぶことが出来た」というコードが2つあった。＜自己の看護観＞は、「患者の価値観に、寄り添う看護師になりたい」の1つのコードであった。＜実施したケアの振

り返り」は、「臨床での自分自身の行動を振り返り、反省点、改善点に気づくことが出来た」などの2つのコードがあった。＜臨床での自己の傾向に気づく＞は、「演習を通して、患者説明時の自分（学生）の話し方の特徴に気づけた」などの2つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標6、7と符合していた。

#### 10. 【多様な実習形態】

＜多様な実習形態＞の1つのサブカテゴリーがあった。「看護師役、患者役、観察者役のそれぞれの立場を通して感じたことや気づけたことが多くあった」などの2つのコードがあった。このカテゴリーは、実習目標6、7と符合していた。

### VII. 考察

学生の学びの場所として、臨地実習、学内実習、全体を通してのそれぞれの学びとカテゴリーの関連について考察する。

#### 1. 臨地実習での学び

臨地実習で直接患者と接することで、患者が抱えてきた病歴や退院後もその疾患と付き合うことなどの＜患者背景の理解＞を行うことで、長い経過を持つ【慢性疾患患者の理解】に繋がったのではないかと考える。また、患者理解のためには、【患者とのコミュニケーション】として言語的・非言語的コミュニケーションを活用し、＜患者への傾聴と共感＞の必要性を改めて学ぶことができた。看護学生の看護実践能力に関して、看護学基礎カリキュラム（文部科学省、2011）に、「慢性疾患及び慢性的な健康課題を有する看護の対象を援助する能力」とは、慢性疾患による健康課題の出現と日常生活の維持との関係を理解し、当事者が生涯に渡って、疾患管理、悪化・進行を予防した療養生活が送れるように援助する方法を説明できる能力も含まれると明記されている。学生は、患者の意欲を高

められるよう患者の認識の把握などを行っており、患者のライフステージと発達課題、慢性的な健康障害の発症・経過と生活史がどのように影響しあっているのかを学び得たのではないかと考える。

また、【個別性の看護の提供】【患者に合わせたケアの提供】【患者の観察とアセスメント】は、直接患者と接することで、バイタルサイン測定などの観察を行うだけでなく、日々変化する患者の体調変化を捉え、どのように看護援助を実施すればよいのかを考えながら実施することで得た学びであると考ええる。井伊ら（2013）は、慢性的な健康障害を持ちながら生活していくことの問題点は多くあり、その問題点をいかにサポートすることができるかが看護者としてのケアのポイントであると述べており、学生も援助計画を立案・実践しながら、患者の反応、問題点に基づいた評価を行い、次の援助に発展させており、その結果学びへと繋がったのではないと考える。

#### 2. 学内実習での学び

【患者への指導方法の検討】は、ビジュラクラウド<sup>TM</sup>の教材事例を活用した看護過程の展開、セルフマネジメントに関する援助のロールプレイを行った。学生が看護師役だけでなく、患者役、観察者役の体験、実施・評価を行ったことで、＜患者が実施可能な指導を考える＞＜患者と一緒に指導内容の確認＞＜患者の理解度に合わせた指導方法＞という様々な視点から患者指導への方法について学びを得ることができた。患者に指導を行うには患者自身の気持ちに寄り添うことも必要であるため【患者の価値観の理解】や＜患者背景の理解＞＜患者の病気の過程の把握＞という【慢性疾患患者の理解】を行ったうえで、個別的な【患者への指導方法の検討】を学ぶことが出来たのだと考える。

さらには、患者の指導という看護実践を提供

するには、人体の構造や病態学、看護学の基礎的知識が必要不可欠である<基本的な学習・知識不足>を実感していた。

### 3. 全体を通しての学び

学内実習において通常の臨地実習以上にカンファレンスの時間を多く設けられたことで、グループメンバーの意見を傾聴し自分の意見を再考する必要性に気づき自分自身のケアを振り返る機会があった。自己の意見を他者に伝わるように述べることや他者の考えを積極的に聴くというコミュニケーション技術は重要（川野，2016）であることに気付くことができた。また、学生同士は、他学生から影響を受け自分自身を見つめ、自分から他学生に働きかけることを通して、最終的には相互の方向に影響する（藤尾ら，2018）ことについても学ぶことができたと考える。学生は実習における多くの体験から学び、自分なりに看護に対する考えを深める過程で生じる混乱という体験を通して自己成長していく（掛谷ら，2007）。一方、実習での体験がどんなに豊かであっても、その体験の認識が学生の意識化に至らなければ、主観的な体験で終わってしまう（浅井ら，2007）という指摘もある。学生の看護観を明確化することはその後の学習意欲の推進、看護師への自信につながるため重要（青木ら，2019）と述べられており、臨地実習、学内実習の中で自分が行った看護援助を振り返りつつ、看護に対する思いを深めることで<自己の看護観>を認識し、結果的に【自己成長の機会】に繋がったのではないかと考える。

さらに、【多様な実習形態】については、コロナ禍によって得た、ビデオ視聴による学びや学内実習でのセルフマネジメント演習により、「看護師役、患者役、観察者役のそれぞれの立場を通して感じたことや気づけたことが多くあった」と学生から前向きな意見が聞かれた。

臨地実習の中止による学内実習での代替えの実習であったが、それぞれの立場での考える視点を設けたことで、学習内容の構成、指導方法に示唆を得ることができたと考える。

### 4. 成人看護学慢性期実習到達目標とカテゴリーおよび学生の学びの場所との関連

学生の学びの場所とカテゴリーの関連をもとに、成人看護学慢性期実習到達目標と照らし合わせて学生の学びの関連について考察する。各カテゴリーと成人看護学慢性期実習到達目標との符合については、図1を記した。ただし、目標6、7は、看護職者としての看護の向上、看護観の確立など類似している点もあるため、目標との関連は同じであると捉えた。

目標1の患者との援助の人間関係、目標2の患者の個別的状況理解は、実際に臨地実習で患者を理解しようと関心を持ち、積極的なコミュニケーションを通して患者との援助の人間関係を築くことができた。これにより、目標3の看護上の問題点・患者のニーズの理解として、患者への個別性のある看護ケアの提供ができたのではないかと考える。また、学内実習のカンファレンスにおいて、慢性疾患患者の理解や指導方法を学んでいく上で、対象の成長を援助する過程の中で、学生自身も変容を遂げること（Mayeroff, 1971/1987）ができ、実践した看護とそこでの対象の事実としての反応を振り返り、洞察することによって体験を意味づけ、臨床の知として自己の中に蓄積する（柘野ら，2012）のではないかと考える。このことから、臨地および学内実習の相互作用によって目標6、7の主体的に学び続ける姿勢・看護観の確立に対する学びが深まったのではないかと考える。

目標4の患者の権利の擁護・倫理観・安全的視点については、学生の提出した研究対象とした記録物からは、これらの学びを抽出することはできなかった。患者理解とともに患者の権利



の擁護、倫理観が培われたと思われるが、意識化させるためにカンファレンス等での教員のファシリテートが必要であると考える。

新型コロナウイルス感染症の発生に伴い、実状を踏まえ臨地実習に代えて演習又は学内実習等を実施することにより、必要な知識及び技能を習得することとして差し支えない（文部科学省 b、厚生労働省、2020）とされており、A 大学においても臨地実習の急遽中断により学内実習を実施した。しかし、臨地実習、学内実習、

全体を通して成人看護学慢性期実習の到達目標それぞれに対して、学生は学びを得ており、「臨地実習で看護する喜びや難しさとともに自己の新たな発見を実感しつつ看護の特質を理解し学習を深め、この過程を通して学生は大きく成長（文部科学省、2002）」することが出来たのではないかと考える。

## 5. 今後の課題と展望

患者の安全を考慮した行動、患者の権利を擁護する視点について、実習最終日にヒヤリ・

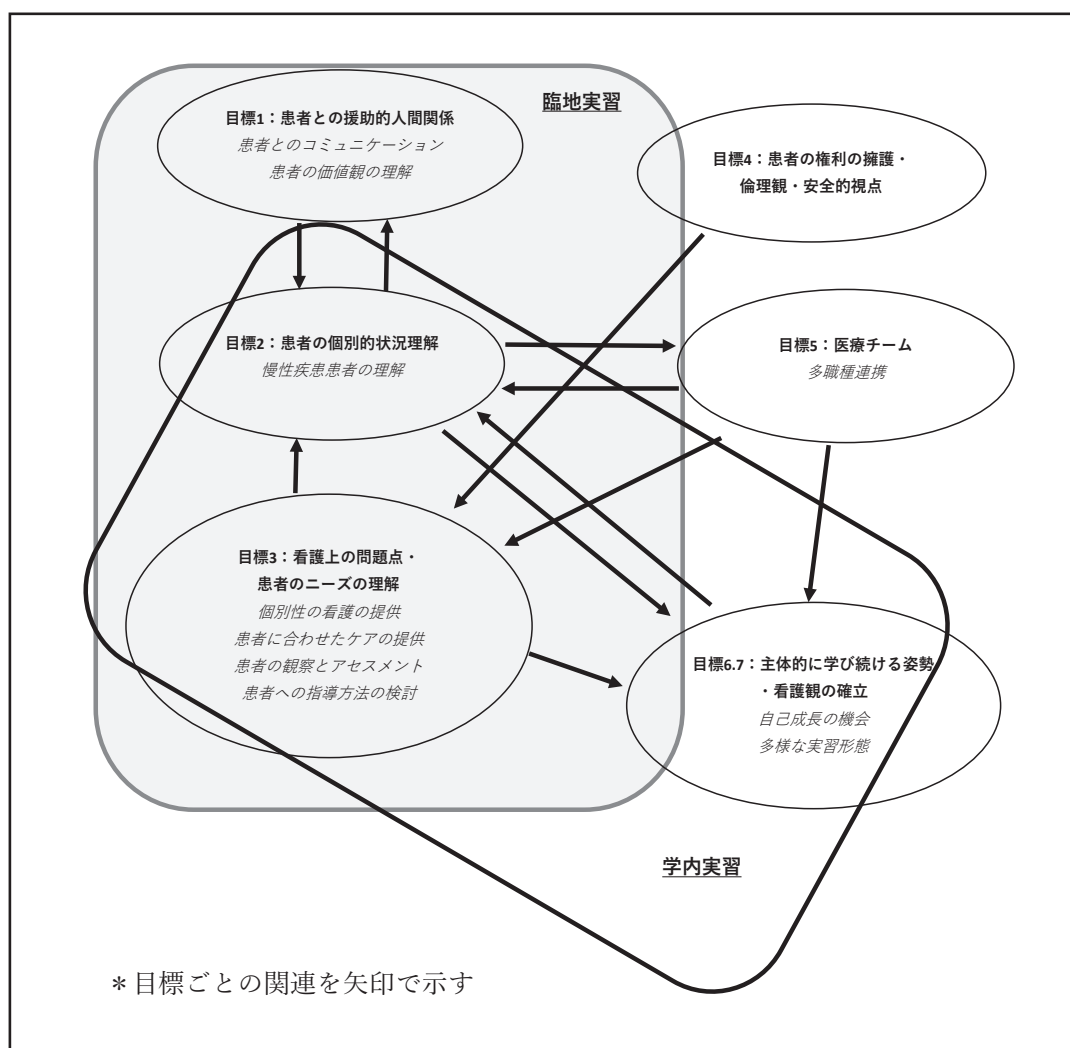


図1. 成人看護学慢性期実習到達目標とカテゴリーの関係

ハットカンファレンスを通じて医療安全の学習を行っていたが、ケア提供場面で体験できることが少なかったことで、この部分による学びを得ることが出来なかった。また、医療チームに対して【多職種連携】のカテゴリーが生成されているが、直接患者に関わる関係従事者との連携であり、臨地実習でしか学ぶことが出来ないものであったため、臨地実習が少なく学内実習となった学生の学びを得る機会が少なかったと考える。今後、地域包括ケアシステムの構築により在院日数の短縮化が進み、継続した看護を行うためには、施設内の多職種との連携だけではなく、施設外の多くの職種と連携することが必要不可欠となるため、地域連携部門も含めた多職種連携の重要性についての学びを提供できるよう検討していく必要がある。

今回のコロナ禍による臨地実習期間の短縮により学生の学びについて考えるきっかけになったが、今後も“With Corona”の時代ともいわれ、さらには大規模災害等による臨地実習への影響により臨地実習の予定変更が余儀なくされる状況が生じることが想定される。臨地実習と学内実習の両方を体験した6名の学生ではあったが、臨地実習での日々の学びを学内実習で言語化し自己を振り返ることで、臨地実習での学びを深めることが出来ていた。このことから、臨地および学内実習での学習内容の構成、指導方法等、学習者である学生がどのような学びを得ることが出来るのか、学習の質の保証を行い、多様な実習形態方法の検討し続けることが重要である。厚生労働省（2020）から、臨地と大学をオンラインで接続し、「臨床実習への協力の同意を得た患者にオンラインで聴取する」、「指導教員が収集した患者の日々の様子の映像情報を用いて、計画を策定する」、「リアルタイムの患者の状況を確認・評価しながら、日々の計画を策定する」「学生が役割分担するなどにより、学内でのロー

ルプレイを通じて技術を修得する」など、実習等に関する各学校養成所等での実践事例が提示されている。今回の経験を活かし、効果的、効率的な臨地および学内実習の在り方等、今後も検討していく必要がある。

## VIII. 結論

コロナ禍における成人看護学慢性期実習で臨地実習と学内実習の両方を体験した学生の学びの認識は、56のコードから19サブカテゴリー、10カテゴリーが抽出され、以下のことが明らかとなった。

1. 臨地実習での学びは、患者とのコミュニケーション、慢性期疾患患者の理解、患者に合わせたケアの提供など臨地実習で直接患者と接することで、患者との相互関係により学びを得ていた。
2. 学内実習での学びは、セルフマネジメントに関する援助のロールプレイを行い、学生が看護師役だけでなく、患者役、観察者役の様々な役を通して患者への指導方法を学ぶことができた。
3. 学内実習での学びは、カンファレンスの機会を持ったことで、相手の意見を傾聴し自分の意見を再考する必要性に気づき、自分自身を振り返る機会となり、通常の臨地実習以上に自己成長の機会を得る学びとなった。
4. 臨地実習と学内実習の両方を体験したことでの学びは、臨地実習での日々の学びを学内実習で言語化し振り返ることで、臨地実習での学びを深めることができた。
5. 臨地実習と学内実習の両方を体験したことでの学びと、実習到達目標との関連性が明らかとなった。
6. 臨地実習が少なくなったことで、患者の権利や倫理観に基づいて行動すること、多職種連携のチーム医療についての学びが少なく、

今後、臨地および学内実習や講義、他領域実習の関連も考慮したカリキュラムを検討していく必要性が示唆された。

## 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

## 文献

青木亜砂子, 佐々木律子 (2019) : 看護学生の看護観の形成に関する文献検討, 北海道教育大学研究紀要, 43, 107-116.

浅井直美, 小林瑞枝, 荒井真紀子他 (2007) : 看護早期体験実習における学生の意味化した経験の構造, Kitakantou Med J. 57, 12-27.

藤尾麻衣子, 藤谷章恵, 大武久美子他 (2018) : 臨地実習において学生同士が互いに及ぼす影響に関する文献研究, 武蔵野大学看護学研究所紀要, 12号, 31-39.

藤原正恵, 江口秀子, 葛場美那 (2018) : 成人看護学実習Ⅱ (急性期) における学生の学び-実習終了後のレポートからの分析を通して-, 大阪青山大学看護学ジャーナル, 2巻, 58-68.

伊井みづ穂, 石野レイ子 (2013) : 慢性的な健康障害を持つ生活者に対する学生のイメージの変化, 関西医療大学紀要, Vol. 7, 17-22.

掛谷益子, 名越恵美, 細川つや子他 (2007) : 成人看護実習前後の看護観の変化, インターナショナル Nursing Care Research, 6 (1), 59-66.

川野司 (2016) : アクティブラーニングとして討論を取り入れた授業の有効性, 九州看護大学福祉大学紀要, 17 (1), 47-59.

河野貴大, 大山末美, 兼子夏奈子他 (2021) : 慢性看護学実習における遠隔実習プログラ

ムの構築と実践, 聖隷クリストファー大学看護学部紀要, No.29, 77-84.

厚生労働省 (2020) : 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設等の対応について (6月1日事務連絡). 厚生労働省ホームページ, [www.mext.go.jp/content/20210603-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/content/20210603-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf). (検索日: 2020.1.6)

厚生労働省医政局看護課 (2020) : 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う看護師等養成所における臨地実習の取扱い等について (6月22日情報提供). 厚生労働省ホームページ, [hojin.nurse.or.jp/hojin\\_system/upload/9900049620200623135630fl\\_1/20200623-725.pdf](http://hojin.nurse.or.jp/hojin_system/upload/9900049620200623135630fl_1/20200623-725.pdf). (検索日: 2020.1.6)

厚生労働省 (2003) : 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書, 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会 (3月17日). 厚生労働省ホームページ, [www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html](http://www.mhlw.go.jp/shingi/2003/03/s0317-4.html). (検索日: 2020.1.6)

太田晴美, 大崎真, 早坂笑子 (2021) : 新型コロナウイルス禍の学内統合看護実習評価-学生アンケート結果から-, 東北文化学園大学看護学科紀要, 第10巻, 第1号, 27-42.

佐藤美紀子, 森山美香, 矢田明子他 (2012) : 成人看護学実習 (急性期) における看護学生の成功体験, 島根大学医学部紀要, 35巻, 39-46.

栢野浩子, 塩見和子, 磯本暁子他 (2012) : 成人看護学実習Bにおける学生の学びに関する研究-実習総括記録からの検討-. 新見公立大学紀要, 第33巻, 29-36.

Milton Mayeroff (1971) / 田村真, 向野宜之 (1987) : ケアの本質 生きることの意味, 東京: ゆるみ出版.

安酸史子, 北川明編 (2018): 看護を教える人  
のための経験型実習教育ワークブック. 東  
京: 医学書院.

文部科学省 (2002): 大学における看護実践能  
力の育成の充実に向けて, 看護教育のあり  
方に関する検討会報告, 臨地実習指導体制  
と新卒者の支援 臨地実習のあり方 (3月  
26日). 文部科学省ホームページ. [www.  
mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/  
koutou/018/gaiyou/020401c.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/018/gaiyou/020401c.htm). (閲覧  
日2021.1.6)

文部科学省 (2020a): 大学における看護系人材  
養成の在り方に関する検討会 第二次報告  
看護学実習ガイドライン, 大学における  
看護系人材養成のあり方に関する検討会.  
(3月30日). 文部科学省ホームページ.  
[www.mext.go.jp/content/20200330-mxt\\_  
igaku-000006272\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/content/20200330-mxt_igaku-000006272_1.pdf). (閲覧日2021.1.6)

文部科学省 (2020b), 厚生労働省 (2020): 新  
型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療  
関係職種等の各学校、養成所及び養成施設  
等の対応について (6月1日) 事務連絡,  
文部科学省ホームページ. [www.mext.  
go.jp/content/20200603-mxt\\_kouhou01-  
000004520\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/content/20200603-mxt_kouhou01-000004520_2.pdf). (閲覧日2021.1.6)

文部科学省 (2017): 看護学教育モデル・コア・  
カリキュラム～「学士過程においてコアと  
なる看護実践能力」の修得を目指した学修  
目標～. 大学における看護系人材養成の在  
り方に関する検討会 (10月)), 文部科学省  
ホームページ. [www.mext.go.jp/b\\_menu/  
shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_  
\\_icsFiles/afldfile/2017/10/31/1397885\\_1.  
pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/___icsFiles/afldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf). (閲覧日2021.1.6)

文部科学省 (2011): 資料3-1 看護学基礎カリ  
キュラムの解説資料 (案), 看護学基礎カ  
リキュラムを大学に周知する際に添付する

解説文 骨子案, 文部科学省ホームページ.  
[www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/  
koutou/40/siryo/attach/1301134.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/siryo/attach/1301134.htm)  
(閲覧日2021.1.6)

村岡祐介, 館山光子, 井澤美樹子他 (2020):  
成人看護学実習における学生の満足度と教  
員の関りや実習目標の理解度・達成度の関  
係性の検討. 弘前学院大学看護紀要, 第15  
巻, 1-10.

長嶋祐子, 中居由美子, 風岡たま代他 (2012):  
成人看護学実習で学生が最も学んだと認識  
している内容—急性期実習と慢性期実習の  
実習終了後レポートの分析から—. 横浜創  
英短期大学紀要, 第8号, 155-160.

日本看護系大学協議会 (2019): 看護学実習ガ  
イドライン. 日本看護系大学協議会看護学  
教育向上委員会 (12月23日). 日本看護系  
大学協議会ホームページ. [www.mext.  
go.jp/content/20200114-mxt\\_igaku-  
00126\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/content/20200114-mxt_igaku-00126_1.pdf). (閲覧日2021.1.6)

氏原恵子, 藤浪千種, 幹友紀他 (2021): 急性  
期看護実習における遠隔実習の実際と今後  
の課題, 聖隷クリストファー大学看護学部  
紀要, No.29, 45-53.